

レーモン・クノーの『青い花』における歴史 ＝物語の終焉あるいは金、銀、鉄の形象(その4)

— 1614年の物語から1789年の物語へ —

尾形弘人

はじめに

黄金時代の終焉で幕を閉じた1439年の物語、そして1614年の物語の冒頭を飾る銀の時代への移行、その間175年の書かれざる部分において、オージュ公は貧しい木こりの娘を妃として迎えるとともに、三つ子の娘のそれぞれにも間抜けな小貴族との縁談を調べてやった。単なる気紛れにも見える彼の振る舞いには、しかしながら、ひとつの狡猾な戦略が秘されており、婚姻の祝いのリーヴル銀貨はふたたびノルマンディーの城を潤し、そこにおいてオージュは、三人の守銭奴＝銀の男達を相手に、労働なき飽食の日々を取り戻したのであった。だが、幸福な時も束の間、オージュの分身のシドロランが口にした《鉄の斧》を契機として、テキストは1614年の(そして『青い花』の)中間点において、《工事＝労働》、《彫像＝歴史》といった鉄の時代にこそ相応しい形象について語り始めた。オージュが錬金術師ティモレオ・ティモレイと出会ったのは、この鉄の時代の入り口とでもいうべき地点であるが、『ひとつの規範的な歴史』(以下『規範』)と照らし合わせて見れば、偶然による二人の出会いも歴史＝物語的な必然性を帯びてくる。すなわち、卑金属を本来あるべき黄金に変じようと企てる錬金術師は、労働を通じて起源の黄金時代(労働なき飽食)への回帰を目ざす人間と、同一の目的性、同一の指向性を有するのである。とするならば、錬金術師＝労働する者を城に連れ帰ることにしたオージュの意図は何か。それは他者の労働の搾取によって果たされる自らの労働なき飽食の維持であり、『規範』のいう《隷属化》に他ならない。だが、銀の時代は最終的な破局の先延ばしでしかなく、しかもこの方策はその

最期に用意されたシナリオのひとつである。オージュは今、こういった危うい地点に自ら立って、錬金術師とともに哲学者の石の探求に取り掛かろうとしているわけだが、果たして、黄金（時代）への回帰は成るのか。しかし、大いなる企ての顛末を見る前に、もうひとり別の人物に触れておくことも無益ではないだろう。もしかしたならば、新たに城の住人となるべきは、ティモレオではなく、この人物であったかもしれず、そうなっていれば、1614年の物語から1789年の物語への移行もまた、まったく別様に果たされていたと思われるからである。

V-1. 1614年から1789年へ（その1）：世継ぎと二人の食客

さて、オージュと錬金術師との運命的な出会いの後、場面は三部会のパリからノルマンディーの城へと戻る。妻とは半年ぶりの再会である。長旅から帰郷したばかりの夫に、リュスユールがこう語りかける。

— 高貴なる旦那様、とリュスユールが彼の手に恭しく口づけしながら言った、お話したい素敵な喜ばしい知らせがあります。あなた様はお世継ぎを持たれることになります。

— やったぞ、最愛なる女よ！ さて、我が婿たちはいったいどんな面をすることやら。だが……、教えておくれ、愛すべきリュスユールよ、世継ぎであると、どうして分かるのか？

— 占星術師がそう言ったのです。

— どの占星術師だ？

— 私が占ってもらった占星術師です。それで、分娩の際に星々を見張ることのできるよう、私は彼を城に住まわせました。もちろん、あなた様のお許しがあればの話ですが、高貴なる旦那様。

— 畜生奴、と公爵が顎鬚の中で言う、わしが錬金術師を連れてきたというのに。これでは人が多くなりすぎるではないか。（F.B., p.146）

このやり取りに読み取るべきは、《人口の増加》という新たな問題である。オージュの《飽食》の陰に隠されてはきたが、これもまた歴史の寓意の根幹を成す問題であることは、例えば『規範』の「それ [= 歴史の人口統計学的かつ経済学的な基礎] は生殖と保存という、人間のふたつの基本的な（そして生物学的な）本能に対応している」（*H.M.*, p.33）という記述に明らかであろう。すなわち、（自己）保存に必要な食糧は総じて一定であるのに対し（少なくとも、労働による増加はない）、生殖本能の充足は人間の数を増す一方で、これが決定的な食糧危機をもたらす時、人間は労働の不幸を選び取り、真に歴史の名に相応しい存在となるのである。逆に言えば、黄金時代や銀の時代の前＝歴史的な神話においては、労働なき飽食のみならず、生殖の営みもまた、それが引き起こしかねない人口の過剰を思い煩うことなく、無制限に満たされねばならない²⁾。そのような奔放なる性をオージュは享受してきたはずで、それが今、世継ぎとして結実したことは、確かに喜ばしいことであろう³⁾。だが、そうなるに気が掛るのは、新たに住人を増すことになる城の財政状況＝食糧事情である。これについては明確な記述はないが、以前に見た錬金術師との交換条件から推察すれば⁴⁾、食客のひとりぐらいは十分に抱えておけるらしい。しかし現実には、世継ぎと錬金術師、加えてリュスユールが城に招き入れた占星術師の三人分の食である。それにまた、そもそも外部（労働＝鉄の時代）に在るべき錬金術師を敢えて城の中に入れるのも、他者の労働によって銀の時代を延命させるためであって、窮しているとは言わないまでも、手放しに潤沢とも言えないであろう。《これでは人が多くなりすぎる *cela va faire du monde*》というオージュの危惧はこうした事情を物語るものであり、当然のことながら、誰を残し、誰を追い出すか、という話になる。

リュスユールに宿った子供が城の住人となるべきは言を待たない。とはいえ、肉親の情といったものが問題なのではない。そうではなく、以前にジル・ド・レの寓話に見たように、墮胎や嫉捨といった《減退の方法》は、オージュが身を置いている制限なき性の横溢とは、原理的に相容れないからである。しかも、この子はどうやら男の子で、ノルマンディーの城を正統に継ぐべき

長子である。いわばオージュの《生殖 reproduction》が生み出した完璧なる《複製 reproduction》であり、父親同様の労働なき飽食を享受し、維持し、将来の子孫達に伝えて行くべき《相続人＝世継ぎ héritier》である。自身の幸福のために墮胎の不幸を選び取ることは、オージュの住まう神話的な安楽の永続を自ら断つことに他ならず、これはどうあっても避けねばならぬところであろう。また、同じ観点から、オネジフォールの助言にしたがって、二人の食客をともに追い出すことも得策とは言えまい。余分な出費を抑えるうえでは現実的かつ即効的ではあろうが、これでは破局をただ待つだけのその場しのぎに過ぎず、来たるべき世継ぎに幸福なる城を継がせることも危うくなりかねない。とするならば、錬金術師と占星術師、どちらを城に留め置くべきなのであろうか。

この問いを『規範』の用語で言えば、どちらに食糧の割り当てを認めるべきか、と言い換えることができよう。ここで《割り当て ration》とは、万人にとって平等かつ最良の食糧供給という仮定を修正するための概念で、「かなり複雑な段階になってはじめて、人間は人口＝食物の均衡の問題について、この割り当てを減ずるという解決法を思いつく」(H.M., p.75)とされている。具体的には、戦争と隷属化によって勝者が敗者にこれを強いるか、あるいは同一の集団の内部で強者と弱者の序列を作り出すか、そのいずれかである(万人が平等に節食することは考え難い)。戦争と隷属化については、ティモレオとの一連のエピソードがこれにあたると思われるが、思いがけない占星術師の登場は、食の割り当てという問題を城の内部を舞台として寓話化するものではなかろうか(彼は既に城に住み着いている)。ただし、事はそう単純ではない。オージュが食を与える強者で、二人の食客は割り当てを受ける弱者という図式には違いないが、しかし、ノルマンディーの城が銀の時代の象徴である限りにおいて、その内部で割り当てを云々することなどあり得ない。というのも、そのような城の住人は皆、主人と同様の食を口にするべきだからで、したがって、ここで決せられるべきは、割り当ての多寡ではなく、その有無ということになる。あくまでも、城の住人となって飽食を楽しむか、

追い出されて食に窮するか、そのどちらかである。この読みがいくぶん強引であるとしても、少なくとも、『規範』に示された割り当ての多寡を決する基準は、そのまま食客の選択についても当てはまるであろう。話は簡単で、「価値の概念を作り出すだけでよい」(H.M., p.76) ののである。

V-2. 1614年から1789年へ(その2): 占星術師の《価値》と《追放》

それでは、錬金術師と占星術師、どちらの方が城にとって価値ある存在なのであろうか。ティモレオに寄せられた期待については繰り返さないことにして、新たに登場してきた占星術師の価値を検討しよう。

- [……] ああ、占星術師の御出座しだな。近こう寄れ。お前の名は？
 — デュボン。何なりとお申し付け下さい pour vous servir, 領主様。
 — で、お前は星々を読むのか？
 — 何なりとお申し付け下さい, 領主様。
 — で、お前はわしが世継ぎを得ると見て取ったのだな？
 — 何なりとお申し付け下さい, 領主様。
 公爵はリュスユールの方を向いて言った。
 — こいつは大馬鹿者だ、おまえの占星術師は。(F.B., p.148)

ここで占星術師の見せている恭順な態度は、薪置き場に闖入してきたオージュを《田舎貴族 hobereau》呼ばわりした錬金術師のそれとは全く対照的である。ここには《戦争》の劇画はなく、繰り返されるその口ぶりに示されているように、この占星術師は、戦わずして既に、《隷属化 asservissement》に屈した者の卑屈な面持ちを具えてしまっている。しかし、城の主の奇矯さを思えば、こうした態度は嫌悪されこそすれ、決して彼の気に入るところではない。何しろオージュは、一発蹴り飛ばせば二発返してくるような「戦闘的な神父」(F.B., p.40) を大いに好み、また、自らに絶対的な空腹を知らしめ

た小娘を妃にしてしまうような人物なのである。デュポンは第一印象からして失格であろう。また、その《デュポン Dupont》という名前も、錬金術師のそれがガリレオ・ガリレイを想起させるのに対して、余りにも没个性的で凡庸でさえある。しかも、テキストはこの同じ場面で、ガリレオに先じた天才コペルニクスの名に言及しているのである。もし彼が真に有能な占星術師であったとすれば、歴史に燦然と輝くこの天文学者に由来する名前が与えられていたであろうことは、想像に難くない。ところが、このコペルニクスの成り損ないは、地動説を真っ向から否定して、教会の権威に阿るだけの「おべっか使い=人の尻を舐める者 *lèche-cul*」(F.B., p.150)でしかない。また、ピタゴラスを思わせる天球の音楽を聞くという唯一の特技らしきものにしても、対立候補ティモレオが滔滔と述べる数ある能力のひとつに過ぎないのである⁹⁾。どうも見てもデュポンには城に残すだけの価値はなく、食の《割り当て》は錬金術師のものに決まりのようである。さらにまた、この概念自体、『規範』の《人間の搾取 *l'exploitation de l'homme*》に見られるもので、歴史のシナリオは、錬金術師=労働する者(搾取される者)の選択を初めから予定していたかのようでもある。とするならば、占星術師はティモレオの価値を高めるだけの引き立て役に過ぎず、物語の色付けにはあってもよいが、歴史の寓意としては不要な存在ということになるのだろうか。

だが、デュポンの恭順な態度に騙されるわけにはいかない。この男にはどこか如何わしい雰囲気が漂っている。そう思わせるものは何か。示唆的であるのは、彼の口にする「神の栄光 *Gloriam Dei*」(F.B., p.148)という台詞である。これはシドロランの物語に姿を見せたバイクの牧師が繰り返す台詞であるが、神の栄光を口実に教会への寄付を募って歩くこの男は、もしかしたならば《詐欺師 *escroc*》なのかもしれなかった。デュポンがこの疑わしい牧師の分身であることは大いにあり得ることで、いみじくもオージュは「さて、お前には嘘をつく利益がある。おまえはここにねぐらと食卓を見つけて、わしの費用で安楽に暮らす=美食を楽しむ *se goberger* というわけだ」(F.B., p.149)と皮肉まじりに述べている。つまり、この占星術師は、他人の

《^{アルジャン}お金＝銀》を掠め取ろうとする詐欺師、銀の時代の飽食を片利的に享受しようと目論む^{パラスト}食客＝^{ジット}寄生虫である可能性が高いのである。このように読み進めると、デュポンという凡庸な名前も、凡庸であるからこそ、いっそう疑わしいものに思えてくる。思い出されるのは、日頃食を嘆いて止まないシドロランが、この名前でも高級レストランの客となったことである。妻殺しの嫌疑をかけられた彼には身元を隠す必要があり、いわばどこにでもいそうな名前を騙って、オージュが食すべき《銀の食》を口にしたのである。もしかしたならば、占星術師の《デュポン》も、オージュの城＝銀の時代に潜り込むための偽名であり、彼には身元を隠すべき何かがあるのかもしれない。

デュポンが胸に一物を秘めた存在であるとすれば、彼とオージュの見かけは他愛もないやり取りもまた、ひとつの《戦争》に様変わりすることになる。しかも、この敵はなかなか手ごわく、言葉巧みに事を運んで、オネジフォルなどは「この勝負は公爵夫人と彼女の易者の勝ちだ」(F.B., p.151)と判断し、彼のために錬金術を糾弾し始めたほどである。窮地に立たされたオージュ。「事は煮詰まった」(F.B., p.151)と勝ちを確信して、星々の力を誇らしげに讃え始める占星術師。調子に乗ったデュポンが口を滑らせたことは、オージュにとって幸いであった。世継ぎの予言はやはり詐欺師的な虚言で、妃はまだ妊娠さえしていないことが露見したのである。形勢は逆転、怒りに駆られたオージュは殺さんばかりに相手の首を絞め、息も絶え絶えの占星術師を城から外へと追い払った。こうして勝敗は決したが、それではこの《戦争》に寓意される歴史のシナリオとは如何なるものであろうか。事の顛末もさることながら、それ以上に示唆的であるのは、首を絞められたデュポンを描写する滑稽な一文である。それは「占星術師は両の目を眼窩＝天体の軌道 orbite から追い出そう expulser と望むかのようなものである」(F.B., p.152) というもので、この言葉遊びのうち到我々は『規範』の語る《追放 expulsion》の変形されたシナリオを見て取ることができよう⁹⁾。すなわち、長旅を終えて《外》から城に戻ったオージュが、その時には城の《中》に納まっていた占星術師を力で排除し、労働なき飽食の場をふたたび奪取するという構図である。

それだけではない。占星術師の《追放》と錬金術師の《隷属化》をふたつ並べてみれば、ティモレオが入城する直前にデュポンが追い払われることも、物語構成の必然性として浮かび上がってくる。つまり、《隷属化》が他者の使役と労働の搾取という複合的な形態を有するのに対し、《追放》はこれに先立って採用される、より単純な方策なのである⁷⁾。この意味で、占星術師の登場と追放はやはり物語化されるべき歴史の寓話であると言える。

V-3. 1614年から1789年へ(その3): 陰鬱なる逍遥と錬金術=労働のその後

こうして目論見どおり錬金術師を食客として迎えた城主であったが、1614年の最後の場面に姿を見せた彼は、「孤黙で沈独 *silente et solitaire*」(*F.B.*, p.160)なる面持ちのうちに深い憂鬱を湛えていた。ティモレオが到着した際の、あの「まったく満足 *une entière satisfaction*」(*F.B.*, p.153)とはまったく対照的な表情である。無言のまま続く森林の逍遥、その沈黙を破ったのは、背に主人を乗せた愛馬デモステースであった。三部会出席の際に話題となった《青銅の彫像》の進行具合が気になっていたのである。だが、我々としてはオージュの沈黙の方がよほど気掛かりである。何が彼からいつもの快活さを奪ったのか、彫像の寓意については後述することにして、まずはこれを聞きたい。ようやく口を開いたオージュは、話が錬金術に及んだ時、城の現状をこう語っている。

— 事実を言えば、わしの金庫は空っぽで、間もなく、将来あり得るべき我が世継ぎの貯金箱を割る羽目に陥ることだろう。そういうわけで、もしかしたら占星術師を残しておくべきだったのか、と思ったりもする。奴だったらもっと安く上がっただろうし、公爵夫人も満足していたことだろう。(F.B., p.162)

つまり、賢者の石の探求に没頭するあまり、「聖メネホールド条約によって獲得した相当額の銀貨 *bons écus*」(F.B., p.162)のほとんどを使い果たしてしまったというのである。いよいよ破局も近いと思われるが、ここで問題としたいのは、占星術師を追放したことに対するオージュのちょっとした後悔である。シナリオにしたがって、全てはけりが付いていたのではないのか。それとも、あの似非コペルニクスには、オージュの見逃していた価値が秘されているとでもいうのであろうか。そしてまた、公爵の妻に対する気遣いは、いったい何を意味するのか。ここで思い出されるのは、リュスユールがオージュにとっての《カサンドラ》であったことである。すなわち、絶対的な空腹を知らしめ黄金時代を葬り去った女性、しかしながら婚姻の祝いによって銀の時代をもたらし、同時にまた、夫となるべき男の破局を《予見》するかのよう⁸⁾に、フランス革命歌を舞い歌った女性である⁹⁾。だがリュスユール=カサンドラにしても、危機の予見はできても、いつ、どのような破局なのか、そこまでは言い当てることはできないであろう。漠とした危機の《予見》は確固たる《予測》となるのでなければ、その警句はいつしか忘れ去られてしまう。カサンドラの悲劇はまさしくこれで、蓋然性を確実性として述べ伝える術が彼女には欠けていた。だからこそリュスユールは、自己の欠陥を補うために、天体の運行からこの世の出来事を読み取る(と自負する)占星術師を城に住ませたいと望み、欺瞞が露見してもなお、必死にその命乞いを夫に求めたのではなかろうか。だが、詐欺師デュポンは別にするとしても、一般に占星術と呼ばれるものは、彼女の意図に適うような代物なのであろうか。言い換えるならば、天体の動きによって、歴史を予測することは可能なのだろうか。

こういった問いは、オカルト信者でもなければ全く意味をもたない問いであろうし、リュスユールにしても、迷信深い見栄っ張りな女に過ぎないのかもしれない⁹⁾。だが、『規範』がこれに言及しているとあっては、話は別であろう。しかも、この歴史の書は、「最初の深い考察は、天文や気候などの現象と人間の不幸との相関関係を発見しようと努めるであろう」(H.M., p.13)と、

まさしく占星術的なものから歴史を語り始めているのである¹⁰⁾。さらに、その結末ならざる結末においても¹¹⁾、太陽の黒点と経済危機の関連性を例に、「周期的に起こる事象のいくつかは、相伴うものとして、あるいはまさしく原因として、おそらくは歴史的な現象と関連付け得ると、あらゆる歴史が認めている事に注目することが、何よりもまず重要である」(H.M., p.113)と語られている。それ故、星辰の運行と歴史的な出来事との相関関係を読み取る(とされる)占星術師は、歴史の寓意から《追放》されるどころか、その重要な登場人物となり得たし、また、城の安泰のためには、是非とも身近に残すべきであったとも思われる。というのも、デュポンが讃える「この世の運命を司る *gérer les fortunes* 天空の力」(F.B., p.152)という表現のうちには、《財産を管理する *gérer la fortune*》ことが含意されており、リュスユールは子に相続させるべき財産を守るために占星術師を必要としたとも考えられるからである。これに対して、錬金術を選んだが為に世継ぎの貯金箱をも危うくしてしまったオージュ。それ故、彼の後悔と気遣いも故無きものではないと言えようが、ただしそれは単に占星術師の方が安く上がるということではなく、歴史＝物語の展開において占星術が果たし得る可能性が問題なのである。

とするならば、むしろ錬金術師の方が、厄介な食客＝寄生虫ということになるのであろうか。『規範』を見れば、確かに錬金術に関する言及は一度しかなく、しかも否定的な文脈に置かれている(これについては、後に触れる)。しかし、だからと言って、ティモレオ・ティモレイが歴史＝物語の登場人物として相応しくないということにはならない。冒頭で確認したように、哲学者の石の探求以上に的確な労働の隠喩は他にはなく、何といても目指すものは黄金(時代)への回帰である。現状において城の窮状を招いているとしても、見込まれる成果は損失を補って余りある。いまさら追い払った者を悔やんでいる場合ではないだろう。実際、オージュは希望を失っているわけでは決してない。

— [……] これでも、わしはお前に我々の操作の最も表面的な側面し

か語ってはいないのだ、我が善きデモよ、お前の主人と彼の錬金術師がこんなにも大いに苦勞していることは絶対に無駄ではないと、お前だっ
て思うことだろう。天使たちが我々の作業に報いてくれる日がやって来
るだろう。そうしたらもはや青銅などではなく、たっぷりの黄金で私の
彫像を鑄造させてやるのだ。

— 私たちの彫像ですよ (F.B., p.163)。

それでこそオージュと言いたいところであるが、しかし、彼の言葉自体の
うちに密かに宿った不穩な影を看過するわけにはいかないだろう。まずは《作
業 *œuvre*》という語に注目しよう。錬金術の用語で、黄金の生成は《大いなる
作業 *le grand œuvre*》と称されるが、その《作業》という語はラテン語の
《*opus* 作品, 労働》を語源としており、あからさまではないにせよ、オージュ
は《労働》という最も遠ざけておきたいものを、ここで自ら口にしたのであ
る。これは《操作 *opération*》も同様で、こちらは《*opera* 労働, 活動》(*opus*
の複数形 *operis* より) から来ている。もっとも、オージュは錬金術師=労働
する者の搾取を目論んでいるのだから、彼の言葉にこれらの語が見られるか
らといって、それだけでは不穩でも何でも無い。しかし、彼は《我々の作業
nos œuvres》, 《我々の操作 *nos opérations*》と言ったのである。これらが実
地での共同作業であることは内容から明らかで¹²⁾、彼の言う《作業, 操作》は、
もはや純然たる他者の労働ではあり得ない。つまり、他者に課したはずの勞
働がいつしか自身に翻り、自らが労働の現場に立たされてしまっているの
である。銀の時代を維持するための方策がその神話自体を危うくするという疎
外の構造ないし再帰性は、《こんなにも大いに苦勞する=自らにこんなにも多
くの苦しみ与える *se donner tant et tant de mal*》という表現にも見て取れ
る。苦勞, 悪, 不幸, 病氣, 痛みなどを意味する《*mal*》の本義は肉体的, 精
神的な《苦痛 *souffrance*》にあるが、《労働 *travail*》という語も、まさしく
苦痛を与えるために考案された《拷問器具 *tripalium*》に由来するのである。
その動詞形《働く *travailler*》も、元来は《*tripalium* を用いて拷問する

tripaliare》を意味し、次第に一般化して《苦しめる faire souffrir》の意を得た。いくぶん拡大解釈にもなるが、《苦勞をかける donner du mal》ことは、拷問にかけること、苦しめること、労働させることと同一の意味場に属しており、その再帰的な用法は、自らを苦しめること、すなわち自らが労働することに帰結する。労働を人間の不幸ととらえるクノーが、これをどれほど意識していたかは不明であるが、ずっと後になって、オージュ自身が「私は彼 [=ティモレオ] の命令の下で働いていた Je travaillais sous ses ordres」(F. B., p.233) と回想する場面が用意されているように、以上のオージュの言葉遣いや言い回しに、彼を付け狙う労働の不穏な影（鉄の時代の不可避性）を見て取ることは許されよう。

V-4. 1614 年から 1789 年へ（その 4）：青銅の彫像とすり替えられた帰り道

とはいえ、以上のことは事後的に振り返ってみて言えることであり、現時点において賭けられているものは、あくまでも黄金（時代）への回帰である。これを再度確認した上で、先に触れかけた《青銅の彫像》に話を戻そう。デモステーンが所有するように主人に勧め、オージュが人を雇って作らせることにした例の騎馬像のことである。だが、「しばらく前から知らせは受けていない」(F.B., p.162) と素っ気ない主人。デモステーンは失望を隠せない。

— それではあなたの名誉はどうなのですか、ということは、あなたはそれはもう考えないというのですか？ ということは、封建の楡の木の前で永遠に青銅色となったあなたを見にやって来るであろう未来の世代のことを、もう思ったりはしないというのですか？ ということは、立像を建てられるというあなたの資格が、あなたの名をあらゆる美術史に掲載させることが分かっている、もう自慢には思わないのですか？ 我々の時代では確かに多くはありませんが、その数は来るべき諸世紀に

おいては止むことなくどんどん増えていくことでありましょう。おっと、私は予言しているのではないか、なんとまあ！（F.B., p.161）

以前にも述べたが、^{モ ニ ュ マ ャ ン}歴史的建造物に自らの姿を刻ませることは、自らを歴史と関係づけることに他ならない。それ故、神話的な（前＝歴史的な）労働なき幸福とは相容れないものであり、実際、それまでオージュは彫像を持つことなど一度も考えたことはなかった。そんな彼を説得したのがデモステータスであり、我々はこの愛馬の熱弁に、鉄の時代の不可避性を認識し、歴史＝労働への配慮を怠らないように説く忠言を見た。このことは上の批判の言葉に一層明確で、《美術史 *histoire de l'art*》に名前が記載されるということは、自らの姿を素晴らしいかたちで後世に残すこと、すなわち、歴史において記憶されるに値する存在となることに他ならない。また、美術史＝歴史がこれから数を増し続けるということも、単に美術史家のフェリビヤン達の登場を含意するだけでなく¹³⁾、まさしく鉄の時代（歴史ないし脱神話）の空間的、時間的な拡大を意味するものであろう。空間的というのは、生殖により増え続ける人間は食を求めて地上の至る所に拡散するからで、時間的というのは、オージュ自身が幸運な例であるように、集団の条件（人口と食物との相関関係）によって、食糧危機の到来には早い遅いの違いがあるからである¹⁴⁾。いずれにせよ、どこを見渡しても労働なき飽食など見当たらなくなる時がやってくるわけで、それ故、来るべき諸世紀の《未来の世代》とは労働の不幸を生きる歴史的な人間存在に他ならず、そのような後世に対して誇るべき彫像を残すことがオージュの名誉だと、デモステータスは語っているのである。

だが、その主人は今、錬金術師とともに、黄金（時代）への回帰を夢想しているのであるから、《永遠に青銅色となった *bronzé pour l'éternité*》姿を衆目に晒すことなど、大いなる作業の途半ばにして倒れた者の墓＝碑を立てることでしかない。黄金の彫像の前では青銅の彫像など見劣りも甚だしく、オージュが「目下のところ、そのことは、まったく気に掛けていない」（F.B., p.161）と語るのも当然であろう。しかしながら、先に見たように、錬金術と

黄金の彫像を語るオージュの言葉のうちには、彼の思ってもみない労働の不幸が密かに含意されていた。この忍びよる危機を明るみに出したのは、やはりデモステータスであった。

なおも散歩は1里の間、沈黙したまま続いた。それでステータスは帰ることに決めたが、もうひとつ別の道を選ぶことにした。公爵は全く反対しなかった、相変わらずの無口、ひそめた眉、虚ろな目。少しして、誰かが呼び止める声を聞いた時、公爵は思わず飛び上がった。彼らは数人の木こりが働く林間の空き地 *une clairière où travaillaient des bûcherons* を通り抜けるところだった。ティモレオ・ティモレイのかまどに材料を供給するための木材の伐採であった。(F.B., pp.163-164)

デモステータスが城に帰るために敢えて選んだ《もうひとつ別の道 *un autre chemin*》とは、いったいどこに通じているのであろうか。先取りして言えば、城は城でも175年後の城である。意図的にすり替えられた帰り道、しかも、決定的な破局が用意されてある1789年の物語へとオージュを導く危険な道、その途上においてデモステータスは、黄金の彫像の夢を打ち砕くかのように、主人の目に労働する者たちの現実の姿を突きつけた。しかも、彼らは錬金術師のために働く者たちであり、ティモレオのものしてオージュのものでもある《我々の作業》を土台から支える必要不可欠な存在である。このことは《材料を供給する=食物を与える *alimenter*》という、それ自体、《食》のテーマ系に属する語の使用に、より明瞭に見て取ることができよう。すなわち、オージュが錬金術師に食物を与えて養い、見返りの労働が主人の《人口=食糧》問題を解決するという図式において、二人のかまどに薪の飯を食わせるのは、これら名もない木こり達なのである。しかも、その木材とは言えば、オージュ自身の領内の森林から切り出されるもので、錬金術師の労働を搾取し、そのために木こり達を使役し続けることは、極端に言って、城の安楽に必要なノルマンディーの資源を枯渇させることにも通じよう。さらに、眠りに落ちか

けたオージュを飛び上がらせた声の主がリュスユールの父親であったことも示唆的で¹⁵⁾、これにより我々はしばし忘れていた単純な事実を思い出す。すなわち、オージュの妻は労働に従事する者の娘であったということである。いくら婚姻の祝いをもたらす銀貨の獲得が急がれていたとはいえ、相手は木こりの娘でなくてもよかったはずである。本来は城の外にいるべきリュスユールを労働なき飽食の場に導き入れたことが後々に禍根を残すようなことになれば、それはオージュ自らが蒔いた種である。というよりも、オージュの分身のシドロランが招いた破局というべきであろうか。というのも、彼が豪勢な食事の際に口にした《鉄の斧》が契機となって、一切は鉄の時代を目指して動き出したからである。そしてまた、シドロランの家政婦となったラリックスもまた、木こりの娘であるという事実¹⁶⁾。リュスユールの父親の呼び止めは実に効果的な一瞬の挿話であり、様々な問題を孕みつつ、1614年の物語はこうして幕を閉じることになる。

V-5. 1614年から1789年へ(その5): デモステータスの名

とするならば、敢えて別の道を選んでオージュを次の時代へと導いて行くデモステータスとは、いったい何者なのであろうか。人語を解し巧みに操るこの馬については興味が尽きないが、とりわけ問題提起的であるのは、オージュが黄金の彫像を《私の彫像》と言った時に、すかさず《我々の彫像》と訂正している点である。とはいえ、自分自身が黄金の騎馬像となりたいなど思っているわけではない。事実、デモステータスは、黄金を生み出すかもしれない錬金術を信じないと断言しており¹⁷⁾、あくまでもオージュを背に乗せた青銅の騎馬像の実現が彼にとっての問題なのである。だが、黄金の騎馬像の可能性を捨て、自らの姿を青銅の騎馬像に凝固させることは、主人とともに自ら労働の不幸に身を投ずることではなかろうか。ここでは最後に、デモステータスという名前を結節点とする多義的な言葉の戯れを検討して、今回のまとめに代えよう。

明示的なものから始めよう。このペルシュ馬の名前については、「齒の間に轡をくわえていても喋るから、デモステーヌ *Démosthène* と名づけられている」(*F.B.*, p.14) と説明されているが、これが弁論術に長けた古代アテネの政治家デモステネス *Dēmōsthēnēs* に由来していることは、あらゆる人名辞典、あらゆる年代記に明らかであろう¹⁸⁾。重要なのは、この人物同定の容易さである。実際、デモステーヌ＝デモステネスほど、物語と史実性、虚構と実在性とが直接的、明示的に結ばれるような名前は他には見当たらない。つまり、この饒舌な馬の名は、そしてこれだけが、物語のみならず歴史にも深く刻み込まれた名前であり、もっぱら物語の内部に枠づけられた他の登場人物達に比して、歴史に最も近い存在であると言えよう。だからこそ、デモステーヌはオージュに彫像＝歴史との関わりを迫り、前＝歴史的な物語（＝神話）に留まろうとする主人を歴史の内なる存在となるように誘うのではなからうか。オージュとデモステーヌの騎馬像の完成は、物語の虚構性を生きるオージュにある種の歴史性を与えるものであり、それは物語と歴史を橋渡しするデモステーヌの名を通してのみ可能なのである。

歴史の肯定は前＝歴史の否定であるが故に、デモステーヌは黄金（時代）への回帰を否定する。単純明快な理屈であるが、しかし、何事においても良き理解者であると思われた愛馬が、賢者の石の発見という決定的な一点に関しては、断固として譲らないのは何故か。このように問う時、我々は錬金術と占星術に対するデモステーヌの懐疑の眼差しを通して、歴史＝物語の根幹に関わる問題へと立ち返ることになる。それは『規範』の冒頭部分に記された歴史批判であり、そこには「それ [= 歴史] は質的な、錬金術的な、占星術的な段階に留まっている」(*H.M.*, p.10) とある。つまり、出来事の意義や因果関係を質的に判断、解釈することに終始してきた従来の歴史に対して、科学としての歴史は「量的な歴史 *histoire quantitative*」(*H.M.*, p.8) とならなければならないのである。詳しいことは省くが¹⁹⁾、『規範』が歴史を人口と食糧との相関的な《量》として扱うものであるならば、そしてまた、デモステーヌが歴史に与する存在であるとすれば、《ステーヌ *Sthène*》という愛称も

また決定的な意味を帯びてこよう。というのも、デモステーン自身、「[必要になるのは] ある種の相当な力量 *une certaine quantité de force* で、今後、その単位は私の名前を担うことになるだろう [……]」(F.B., p.274) と自己言及的に述べているように、これは力を計量する単位《ステーン *sthène*》に他ならないからである。さらにまた、この発言に見られるステーンの預言者めいた口調はどうであろうか。あるいは、《美術史》が増え続けると語った際の、自己の予見能力に気づいたかのような口ぶりかどうか(《おっと、私は予言しているではないか、なんとまあ! *Tudieu, je prophétise, ma parole!*)。このようなことを問うのも、《量的な歴史》の目的が、まさしく「出来事を予見し、行動し、修正する」(H.M., p.10) ことにあるからである。つまり、デモステーンの名には、先に見たような物語=歴史それ自体を意味内容とする、より上位の歴史に関する言説が刻み込まれてもいるのである。

さらに意味の連鎖は続く。力量単位の《ステーン》は、《力》を表すギリシア語 *sthenos* を語源とするが、ここからギリシア神話の怪物《ステンノ *Sthéno*》を連想することは難しくない。姿を見た者を永遠に石の立像と化し、青銅の手と蛇の頭髮をもつとされるゴルゴン三姉妹の長女である。錬金術に寄せるオージュの期待を否定し、永遠に《青銅色の立像》と化すことを求めるデモステーンは、相手を射すくめて動きを止めるゴルゴンの視線を思わせはしないだろうか。実際、馬上のオージュは為す術もなく(別の道を選んだデモステーンに《公爵はまったく反対しなかった》)、破局が用意されてある1789年の物語に連れて行かれるのである。ここまででも出来すぎのように思われるが、さらにまた、三姉妹のうち唯一不死ではなかったメドゥーサは、ペルセウスに首を撥ねられ絶命するも、その傷口からは有翼の神馬ペガサスが生まれた、と神話は続いている。そうなれば、クノー流の戯れに倣って、デモステーンの天翔ける姿を見てみたいものだ、とも言いたくなる。他方、メドゥーサの首は、その後、アテネの守護神アテナの楯に据え付けられて女神を守り、そのアテネには雄弁なる政治家デモステネスがいて……、と意味の連鎖は出発点に戻る。

だが、これだけではない。史実としての歴史(実在したデモステネス)、メタ=歴史の科学性(計量単位ステーヌ)、神話ないし前=歴史の想像的な産物(ゴルゴン姉妹ステンノ)の何れとも通じ合うデモステーヌの名前は、同時にまた、これら全てのことを物語として記す『青い花』のエクリチュールをも指し示している。実際、クノーの読者ならば、この馬のもうひとつの愛称である《デモ》からギリシア語の《民衆 *demos*》を、そしてこの語から派生した《民衆言語(希 *dēmotikos*, 仏 *démotique*)》を連想することは極めて自然である。それは作家クノーの出発点となった深い言語体験であった。すなわち、書き言葉と話し言葉の間に乖離が見られるフランス語に対し、ギリシア語では民衆の言葉で文学作品が書かれていることを知ったクノーは、いずれはラテン語同様に死語と化すであろう文語的書き言葉を捨て、民衆の話し言葉で文学を書き始めたのである。そして、ここから生まれたエクリチュールが、我々が今読んでいる『青い花』を書き綴る言葉なのであるから、デモステーヌはこのテキストの内容(『規範』の寓意化)のみならず、その形式(書かれた話し言葉)とも関わっているように思われる。だが『青い花』における物語=歴史を生み出すものとしてのエクリチュールについては後に検討することにして、ここでひとまず1614年の物語の読みを終えることにしよう。

註

*) 使用テキスト

Raymond QUENEAU, *Les Fleurs bleues*, Gallimard, 《folio》, 1965. (なお引用に際しては略号 *F.B.* を用いる。)

Raymond QUENEAU, *Une Histoire modèle*, Gallimard, 《nrf》, 1966. (なお引用に際しては略号 *H.M.* を用いる。)

- 1) シドロランもまた、金、銀、鉄を描写のうちに秘するセーヌ川をカヌーで下り、また流れを遡ることによって、錬金術=労働の迎るべき純化ないし起源への回帰を自己言及的に示していた。
- 2) 『規範』は「増加の形態にはいかなる障害もなく、とりわけそれぞれの男性にとって十分な数の女性がいる」(*H.M.*, p.68) ことを暗黙の前提としている。
- 3) 世継ぎを得るという問題は、実は1264年の物語の冒頭近くに組み込まれていた。

— それで相変わらず世継ぎはないのが、と王が尋ねた。

— ああ、悲しいかな、とオージュは言った、私には三つ子の娘しかいません。ということは、断言いたしますが、苦難の道ということです。(F.B., p.24)

- 4) オージュは錬金術の成果と引き換えに、「王侯のように＝豪勢に *princièrement* 食糧を提供しよう」(F.B., p.139)と提案していた。また、後に見るように、城の住人となる者には《安楽に暮らす＝美食を楽しむ *se goberger*》ことが許されるらしい。これらはともに労働なき飽食の記号《貪り食う *dévoré*》を想起させよう。
- 5) F.B., p.138 を参照のこと。
- 6) 本来の《追放》とは、食に窮した集団が他の集団に戦争を仕掛け、力でこれを排除してその地の労働なき飽食を横取りするというものである。
- 7) 『規範』は戦争の諸形態として、まず《皆殺し》と《追放》を挙げ、「最後に隷属化であるが、これは複合的な状態であり[……]」(H.M., p.50. 強調は筆者)と記述を進めている。なお、《皆殺し *extermination*》については、「オネジフォルは犠牲者に終油の秘蹟を授けるため、必要なものを持ってくるように、リファント神父に命ずる」(F.B., p.152)とあるように、オージュはこのシナリオを演じきることもできたが、占星術師がふたたび登場することはないのだから、結果においては同じ事である。
- 8) オージュは次の1789年の物語において、フランス革命の勃発により、永遠に城を後にすることになる。
- 9) リュスールは「高貴なる旦那様、私は王妃カトリーヌとまったく同じように占星術師を抱えることを誇らしく思っていたのです。私はあなた様の威厳のことを……、あなたに相応しい品位のある生活水準 *standigne* のことを考えていたのです」(F.B., p.149)と語っている。なお《*standigne*》はクノーによる英語からの借用語のフランス語化であるが、これにより《*digne* 相応しい、品位のある》を含むことになり、優れた効果を生み出していると言えよう。
- 10) より正確には《天文学的なもの》と言うべきかもしれないが、「彼 [=公爵] はうんざりした目で天文学者 *astronome* を見つめる」(F.B., p.151)とあるように、両者の違いはここではあまり問題とならない。
- 11) 『規範』は序文で掲げていた「歴史の絶対的な科学」(H.M., p.7)の科学性を示さないまま、未完のかたちで出版された。
- 12) 先の引用部分に先駆けて、「[……] 大型蒸溜器や水銀昇華壺、ペリカン鉤や長頸フラスコ、レトルトやランピキの真ん中で、わし等が、ティモレオとわしが、塩と金属をあれこれ扱っている様を、もしお前が見たならば[……]」(F.B., p.163)と語られている。
- 13) この頃の美術史家を挙げれば、1614年以前はヴァザーリ(G. Vasari)の『最良の画家、彫刻家、建築家列伝』(1568)が目につく程度だが、1614年以降になると、例えばバリオーネ(G. Baglione)の『1573年の教皇グレゴリオ13世時代から1642年のウルバノ8世時代までの画家、彫刻家、建築家列伝』(1642)、フェリビアン(A. J. Félibien)の『古代より現代までの最良の画家たちの生涯と作品についての対談』(1666-1688)、ベッローリ(G. P. Bellori)の『現代の画家、彫刻家、建築家の生涯』(1672)などが発表されている。
- 14) 「LI [=《原初の集団の歴史の続き》の項]においては、すべての集団が一緒に危機の時に達すると暗黙のうちに仮定されている[……]。だが、諸集団は異なる時期に危機の時に達することになると考えるほうが単純である。取り囲まれた

[原初の] 集団Gの仮説を続ければ、もしそれがg(i) [=子孫の諸集団] よりも先に危機の時に到達するならば、当然何らかの暴力的解決とg(i)の追放を考えるであろうし、逆にg(i)がそれよりも先に危機の時に到達するならば、集団Gは停滞に向かうか、あるいは消滅することであろう。もし労働という解決法が認められれば、方向は逆であるが、どちらの場合においても、隷属化という可能な解決法が採られることであろう。」(H.M., p.66)

- 15) それは「高貴なる領主殿、我が娘にして公爵夫人は元気であられるか？」(F.B., p.164) という呼び掛けであった。
- 16) ラリックスは「わたしは木こりをしている父の一人娘です」(F.B., p.160) と語っている。
- 17) 先の占星術師に対する後悔と公爵夫人への気遣いに続けて、次のようなやり取りが見られる。
- へえ、とステーナが言った、ああいった輩はみんな同じですよ。
- もしかして、お前は懐疑的なのか、我が善きデモよ？
- 私の考えの奥底を申し述べるのがあなたの望みというのであれば、私はホロスコープなんて信じていません。
- それは、わしもほとんど信じんが。
- 哲学者の石もそうです。
- ああ、とオージュは言った、お前以外の奴がそんなことを言うならば、下顎をぶん殴ってやるところだ。
- 私は信じません、とステーナが言った、でも、あなたが信じることは妨げません。(F.B., pp.162-163)
- 18) ピエール・ダヴィッドの『レーモン・クノーの登場人物辞典』は、『齒の間の響』について、デモステネスが声を大きくする練習に、口を小石でいっぱいにして朗読を行ったことを紹介している (Pierre DAVID, *Dictionnaire des personnages de Raymond Queneau*, PULIM, 1994, p.455)。他方、もう一頭の愛馬《ステファージュ Stéphane》について言えば、相棒との対比において真っ先に浮かぶ歴史上の人物は、おそらく聖ステパノ Stephanos であろうが、しかし、キリスト教最初の殉教者と「ほとんど話し好きではない」(F.B., p.15) という名前の由来との関係ははっきりしない。
- 19) この点に関しては、拙論「レーモン・クノーの『ひとつの規範的な歴史』における歴史＝物語の終焉について」、『人文研究』102号、小樽商科大学、2001を参照のこと。